

自動詞使役と他動詞に関する 中間言語について

浅山佳郎

1. 序 論

1. 1 問題の所在

本稿は、日本語学習者が形成している中間言語を再構成することを目的とする。中間言語とは、ある時点で学習者が形成している目標言語の体系である¹⁾。取り上げるのは、中国語を母語とする中級以上の日本語学習者における、自動詞使役と他動詞という他動的表現の文法である。

野田(1991)によれば、ヴォイスの対立には、文法的なヴォイスと中間的なヴォイスと語彙的なヴォイスがある²⁾。文法的なヴォイスとは、「作る—作られる」「満足する—満足させる」のような、使役の「セル、サセル」と受動の「レル、ラレル」によって対立を表すものである。中間的なヴォイスとは、「壊す—壊れる」「預ける—預かる」のような、自動詞形と他動詞形によって対立を表すものである。語彙的なヴォイスとは、「殺す—死ぬ」「勝つ—負ける」のような、形態的には共通しないが意味的・構文的に対立を表すものである。これらのうち、文法的なヴォイスは生産的であるが、中間的なヴォイスは生産性が低く、語彙的なヴォイスは生産性を持たない。また、3種類のヴォイスは基本的に同じ働きを持ち、互いに競合するが、語彙的なヴォイスが優先され、中間的なヴォイスがそれに次ぎ、文法的なヴォイスが後になる。

本稿は、野田による以上の議論を前提とする。この前提に従えば、当面の課題である他動詞と自動詞使役の使い分けについては、以下の例文³⁾のように、同一の意味を示しうる自動詞使役より他動詞の方が優先するといえることができる。

(1) a ? このあたりがゴルフ場にされる。

b このあたりがゴルフ場になる。

ところで、これは日本語を母語とする話者において形成されている言語体系である。日本語を母語とする話者においては、語彙的・中間的なヴォイスが優先するが、日本語の学習者の中間言語としてはどのようなになっているのか。本稿はこの問題を扱う。

なお、中国語の使役は、使役動詞「使・讓・叫」などを加えて、生産性の高い文型的処理によって作られる。また、中国語では、対格目的語(受事賓語)をとる動詞を「及物動詞」と呼び、それをとらない動詞を「不及物動詞」と呼ぶ。これがほぼ他動詞と自動詞に当たると考えることができるが、日本語の「開くー開ける」のような共通の形態を持つ自他動詞形の対立はほとんどない。また構文的にも動詞に後置される名詞句は、対格目的語に限らない⁴⁾。

1. 2 仮 説

学習者に誤用が起こるのは、中間言語の体系が不完全だからである。本稿の課題である他動詞と自動詞使役については、以下の2点で、学習者の中間言語が不完全であると考えることができる。第1点は、ある動詞が他動詞か自動詞かという各語についての情報が不完全なことであり、第2点は、ある文が他動詞を用いるのがよいか自動詞使役を用いるのがよいかという文構造についての判断が不完全なことである。

中間言語には母語の影響、つまり母語の転移を想定することが可能である。これによって学習者の作る日本語文にある程度の予測を立てることができる。極めて単純化した予測をすれば、前述した第1点については、もともと動詞の自他に関する情報が不完全であるのだから、母語が他動詞なので目標言語でも他動詞を選択するという転移は予測できない。しかし、動詞が取る名詞句に与えられる助詞に母語が転移する可能性は予測できる。母語が他動詞の場合には「ヲ」が、自動詞の場合には「ガ」が選ばれるという可能性である。いっぽう、第2点については、母語が使役文である場合に、目標言語の日本語でも動詞に「せる、させる」が加わり、そうでない場合にはただの動詞が現れるというかたちで、母語が転移する可能性がある。

これに対して、中間言語に対する母語の強い影響を認めないことも可能である。この場合前述した第1点については、学習者の作る文を予測

することは不可能である。いっぽう、第2点については、次のような予測が可能となる。使役は動詞に「せる、させる」を加えるという文法的方法によって産出されるが、他動詞形または自動詞形は各動詞ごとに辞書に記述される情報に基づいて産出される。前者は生産性が高いが後者は低い。体系が不完全な中間言語では、生産性の高い言語型式のほうが容易に作られるので、使役が優先するという予測である。

よって、自動詞使役か他動詞かという他動的表現に関する中間言語としては、2つの仮説を立てる事ができる。強い母語の転移を認めるものと、強い母語の転移を認めないものである。

仮説1：もし強い母語の転移を認めると、母語が使役の場合は使役が現れることが多く、母語が他動詞の場合は使役が現れないことが多い。

仮説2：もし強い母語の転移を認めないと、生産性の高い使役が優先するので、母語が他動詞でも自動詞使役でも、使役が現れることが多い。

1. 3 手 順

分析の対象とする資料は、中国語を母語とする日本語学習者の日本語作文である。学習者は大学および大学院の学生で、日本語の学習においては中級から上級に位置する。人数は53人、作文数は80本、調査年は1986年から1988年、調査場所は中華人民共和国のハルビン工業大学である。この資料から使役にかかわる例文を採集した。採集した例文には誤用と正用の2種類がある。

これらの例文の約半数については、作文を書いた学習者自身にその意味を中国語で調査してある⁵⁾。さらに、資料から採集した例文のうち、中国語での意味の調査を行えなかったものについては、調査を行ったものを参考に、中国語を母語とする教師の助けを得て、その意図を推測した。よって、データとしては、同一の意味を持つ日本語と中国語の例文がある。以下の行論では、日本語作文から採集したもとの例文を「実現形」と呼び、調査または推測した中国語での意味を「表現意図」と呼ぶ。

前述の仮説を検討するために、実現形と表現意図を「自動詞使役文」

と「他動詞文」に分けたうえで、それぞれの組み合わせの分布を見る。これは、以下のような考えに基づくものである。仮説1に従って、もし母語からの転移を強く認めるならば、表現意図と実現形は対応するはずであるから、表現意図と実現形がともに「自動詞使役文」かともに「他動詞文」となる組み合わせに相関分布が現れるはずである。また仮説2に従って、もし母語からの強い転移を認めないならば、表現意図にかかわらず、実現形が「自動詞使役文」となる組み合わせに偏向した分布が現れるはずである。

なお、表現意図で「自動詞使役文」と分類したもののなかに、1例、自動詞ではないものが含まれているが、使役構文であり、また実現形が自動詞使役文であるので、議論の都合上ここに含める⁶⁾。また、実現形となる日本語の自他の分類は、本来の日本語の自他ではなく、作文の作者の判断に基づく。よって自動詞使役の誤用文では、他動詞を自動詞とみなした例が2例ふくまれ⁷⁾、他動詞の誤用文では、6例全てが自動詞を他動詞とみなしたものである⁸⁾。これらの動詞の自他は、作文の作者の意識に基づいて判断したもので、正しくは「自動詞とみなした動詞の使役文」「他動詞とみなした文」となるが、やはり議論の都合上、「自動詞使役文」「他動詞文」としてあつかう。

さらに、分類には「その他」という項目を加えた。これは表現意図に使役が含まれているが、実現形としては自動詞使役文でも他動詞文でもなく、自動詞文によって表されたものが1例存在するためである⁹⁾。

2. 本 論

2. 1 資料の整理

資料から採集した自動詞使役にかかわる誤用のうち、自動詞使役と他動詞の使い分けに関する誤用は13例ある¹⁰⁾。

さらに、資料から自動詞使役にかかわる正用を13例採集した。この13例は実現形と表現意図の両方、またはどちらかに使役を含むものである。加えて、議論上の要請として、表現意図が「他動詞文」でかつ実現形も「他動詞文」である組み合わせも採集しなければならない。これは表現意図と実現形のいずれにも使役を含まないものである。しかし、この組み合わせは、広く採集すると、目的格名詞句を持つ全ての他動詞文

になり、その採集は議論にとって無意味である。よって、ここでは使役と関係する他動詞文に限定する。つまり、実現形の日本語文としては、自動詞使役文でも同一の意味を表す文を作りうるが、出現しているのは他動詞文の形のもので、かつ表現意図に使役を含まない文に限定する。以下の例のような文である。

- (2) a 夢を実現した。
 b 実現了理想。
 (3) a 夜、自習を終える。
 b 晚上結束自習。

これらの例文は、日本語としては他動詞文であり、表現意図にも使役を含まない。同時にこの日本語文は

- (2') 夢を実現させた。
 (3') 夜、自習を終わらせる。

のように、自動詞使役でもほぼ同じ意味を表すことができる。こうした文を、表現意図と実現形の両方が「他動詞文」となる例として採集した。これが19例ある。よって、分析対象となるのは、誤用が13例、正用が32例である。

なお、表現意図については、誤用の13例のうち、作文の作者に直接調査したものが8例、推測したものが5例である。また、使役を含む正用13例のうち、直接調査したものが8例、推測したものが5例である。

2. 2 誤用文の分布

誤用の13例は、次の表1のように分布する。数値はその組み合わせに所属する例文の数である。なお、表現意図が「他動詞」で実現形が「そ

表1 誤用例文の分布

		実現形		
		自動詞使役	他動詞	その他
表現意図	自動詞使役	6	0	0
	他動詞	1	6	—
	その他	0	—	—

の他」になるもの、表現意図が「その他」で実現形が「他動詞」になるもの、表現意図と実現形の両方が「その他」になるものは、本稿での議論とかかわらないので、未採集である。表では「——」と示した。

この誤用の表からは、母語の強い転移を支持する相関を見ることがができる。つまり、表現意図が自動詞使役の場合、それを誤って他動詞で実現するものではなく、全て自動詞使役文として実現されている。表現意図が他動詞の場合も、それを誤って自動詞使役で実現したものは1例だけであり、他は全て他動詞文として実現されている。この表で見ると、母語が使役であるか他動詞であるかは中間言語に転移している。

以下は、誤用の例文である。それぞれaが採集した実現形の文、bが表現意図の文である¹¹⁾。なお、bが()で囲まれているものは、表現意図を直接調査したのではなく、推測したものである。まず、表の上段の左端に分類される、表現意図が自動詞使役文で実現形も自動詞使役文となる誤用例である。

(4) a *子供を寝らせる。

b 讓孩子睡下。

(5) a ?我が国を強大な国にらせることができる。

b 能使我們成為強國。

(6) a *運送費に省かせることができる。

b 能使運費最省。

(7) a *ハルビンの郊外(の景色)は人々を憧れさせる。

b (哈爾濱郊外(的風景)令人神往。)

(8) a *月光が冴えて、山脈は銀色になり、神秘的な感じをさせる。

b (清涼的月光下，山脈塗上了銀色，讓人有神秘的感覺。)

(9) a *工業生産を自動制御して、それに人々の望むとおりに自動運転させる。

b (自動地控制工業生産，使他按照人們的願望自動運転。)

これらの例文は、正しくは、優先的に選択されるべき語彙的または中間的なヴォイスによって実現されなければならない。しかし、表現意図には、全て「讓，使，令」といった中国語の使役を示す動詞が用いられており、それが文法的なヴォイスとして転移したと考えることができる。なお、(7)の「憧れる」には「憧れる—惹きつける」という語彙的な

ヴォイスの対立が、(8)の「感じがする」にも「感じがする／感じを与える」という語彙的なヴォイスの対立が存在する。

注目すべきなのは、(9)を除くと、これらの誤用が全て和語動詞である点である。漢語動詞には自他同形のものも多いが、和語動詞は中間的・語彙的なヴォイス対立を持つものが多い。中間的・語彙的ヴォイスの習得は各語おのおのについての辞書的な情報の獲得なので、学習者への負担が大きい。よってこれらの誤用は、中間言語における中間的・語彙的ヴォイス、つまり動詞の自他性の情報が完全でないことが、和語動詞において強く現れるためであろうと考えることができる。

次は、表の中段の左端に分類される、表現意図が他動詞で実現形が自動詞使役となる誤用例である。

(10) a *子供に起きさせる。

b 叫醒孩子。

ここに分類されるのはこの1例のみである。ただしこの「叫醒」という動詞は、「孩子」が後置されているので他動詞とみなすことが可能であるが、また「叫」は使役構文を作る動詞でもあり、「叫孩子醒過來」といった使役構文が「叫醒孩子」とほぼ同義であることから、これを使役性の他動詞文とみなすことも十分に考えられる。よって、この他動詞文は使役性を本来的に強く持ったものであり、純粹に他動詞文の表現意図を自動詞使役文で実現したものとは言い難い。

次は、表の中段の中央に分類される、表現意図が他動詞で実現形も他動詞となる誤用例である。

(11) a *朝食を済む。

b 吃完早飯。

(12) a *会話の水準を向上する。

b 提高会話水平。

(13) a *効率を向上するべきです。

b 應該提高效率。

(14) a *性能を向上する。

b (提高性能。)

(15) a *友好関係を発展する。

b (發展友好關係。)

(16) a *要求を満足できない。

b (不能満足工廠的要求.)

これらは、格助詞「ヲ」があるところから見て、全て他動詞として用いられた誤用であると考えることができる。しかし、おのおのの動詞は本来全て自動詞であり、正しくは自動詞使役に訂正されなければならない。

2. 3 正用文の分布

正用の32例は、次の表2のように分布する。

表2 正用例文の分布

		実現形		
		自動詞使役	他動詞	その他
表現意図	自動詞使役	6	0	1
	他動詞	6	19	—
	その他	0	—	—

この表からは、母語の転移を支持する相関とともに、生産性の高い使役文への傾斜を見ることができる。つまり、表現意図が自動詞使役の場合は、誤用と同様に、その意図を他動詞で実現したものはなく、全て自動詞使役で実現されたものばかりである。その意味で、母語の強い転移を認めることができる。しかし一方、表現意図が他動詞の場合、意図を自動詞使役で実現した例が、6例ある。これは、他動詞を表現意図とする例の約4分の1を占める。ここには、表現意図の単純な転移だけでなく、他動的表現としての使役への傾斜を認めることができる。強い他動性の意識が、形式的に生産性の高い使役形式をより容易なものとして選択したものであろうと考えることができる。

以下は、正用の例文である。やはりまず、表現意図が自動詞使役で実現形も自動詞使役となる例である。

(17) a 人間を自由に生活させる。

b 讓人們自由自在地生活。

(18) a 学生たちを楽しく生活させる。

b 讓學生們每天都快快樂樂。

- (19) a 人を興奮させる。
 b 令人振奮。
 (20) a 夢を実現せしめる。
 b 使夢得以実現。
 (21) a 犯罪者を働かせる。
 b (讓罪犯労働。)
 (22) a 私の小さな心を急がせた。
 b (使我的幼小的的心着急。)

誤用の例文と比較すると、漢語動詞が多い点が異なる。漢語動詞は対応する中間的ヴォイスを持たないので、語彙的なヴォイスを持つ動詞以外は、他動的表現としては使役が正しい形式となる。よって和語動詞と比べると、表現意図の使役が転移した自動詞使役文が正用となる可能性が高くなると考えることができる。

なお、(20)の「実現する」は自他両用であり、自動詞使役の「夢を実現させる(せしめる)」と他動詞の「夢を実現する」がともに成立する。

次は、表現意図が他動詞で実現形が自動詞使役となる例である。

- (23) a ご飯を済ませる。
 b 吃完午飯。
 (24) a 学生を社会に適応させる。
 b 培養学生適応社会。
 (25) a 手によって溶接棒を移動させる。
 b 由人的手移動鉚条。
 (26) a 二龍山(の風景)はまるで大連の海辺のように人を迷わせる。
 b (二龍山(的風景)好像大連的海辺那樣迷人。)
 (27) a 自動化を発展させる。
 b (発展自動化。)
 (28) a 目標を実現させる。
 b (實現目標。)

(23)は(11)の誤用と同じ動詞である。これと(26)の「人を迷わせる」は使役という意識より、学習者によってパターンとして記憶されていた形式である可能性が残る。また、(28)は(20)と同じ動詞で、自他両用の動詞である。

なお、表現意図が他動詞で実現形も他動詞の例文は、その例を(2)と(3)で挙げており、総数も多いので省略する。

2. 4 中間言語と目標言語の分布

前項までは、誤用例文と正用例文の分布およびその検討を行った。学習者の中間言語は、これら誤用と正用の和である。本項では、その中間言語全体を目標言語となる「正しい」日本語との対比から考える。ここでいう「正しい」日本語とは、誤用ではないという意味であり、具体的には、誤用を正した訂正文と正用の和である。訂正文と正用例文は日本語話者の言語として「正しい」と認めうるものであり、その意味で学習者にとっての目標言語全体となる。一方、誤用例文と正用例文はその時点で¹²⁾学習者が形成している中間言語全体である。

以下の表3は、誤用と正用の両者をあわせた例文の分布をしめすもので、表1と表2の合計である。これは中間言語の分布を示す。また表4は、訂正した誤用と正用をあわせた例文の分布を示すものである。これは目標言語の分布を示す。表の構成は表1・表2と同様であるが、()内は、各表現意図の中で占めるそれぞれの実現形の割合である。また最下段は合計である。

表現意図をおいて合計だけを見ると、表3の中間言語では実現形に自動詞使役を使用する割合が42%であるのに対し、表4の目標言語では40%である。ほんのわずかであるが、中間言語のほうが、実現形に自動詞使役を使用する割合を高くしている。この表で扱った例文は全部で45例であるが、その表現意図、すなわち中国語文では、自動詞使役が13例で29%、他動詞が32例で71%である。これは、目標言語となる日本語での自動詞使役の使用率が、母語となる中国語より1割程度高いことを意味する。中間言語はその目標言語よりさらに自動詞使役を多く用いている。

各表現意図毎に見ると、表4の目標言語では、実現形に自動詞使役を使用する割合が約40%~50%であり、他動詞を使用する割合が約50%~60%である。ここには表現意図による大きな差がない。一方、表3の中間言語では、表現意図が自動詞使役の場合、実現形での自動詞使役の使用率がほぼ100%で、他動詞の使用はない。これに対し、表現意図が

表3 中間言語の分布

		実現形		
		自動詞使役	他動詞	その他
表現意図	自動詞使役	12 (92%)	0 (0%)	1 (8%)
	他動詞	7 (22%)	25 (78%)	—
	その他	0	—	—
合計		19 (42%)	25 (56%)	1 (2%)

表4 目標言語の分布

		実現形		
		自動詞使役	他動詞	その他
表現意図	自動詞使役	6 (46%)	6 (46%)	1 (8%)
	他動詞	12 (38%)	20 (63%)	—
	その他	0	—	—
合計		18 (40%)	26 (58%)	1 (2%)

他動詞である場合、実現形での自動詞使役の使用率が約20%、他動詞の使用率が約80%となり、表現意図による差が大きい。このかたよりは、中間言語では、表現意図と一致する形式のほうに実現形が偏向するためであると考えることができ、強い母語の転移を示すものである。

しかし、表現意図と実現形が一致する場合を見ると、自動詞使役では、目標言語で約50%であるのが中間言語でほぼ100%になり、その差が2倍であるのに対し、他動詞では、目標言語で約60%であるのが中間言語では約80%にしかならず、その差は1.3倍である。この違いは、表現意図は自動詞使役であるが実現形は他動詞でなければならない6例が、中間言語では全て表現意図と同じ自動詞使役で実現されているのに、表現意図は他動詞であるが実現形は自動詞使役でなければならない12例のうち、表現意図と同じ他動詞で実現したものが3割の5例しかないためである。このかたよりは、中間言語では、生産性の高い形式のほ

うに実現形が偏向するためであると考えることができ、母語の転移が生産性によって制限されていることを示すものである。

この両者は次のようにまとめることができる。つまり、中間言語に母語は転移する。ただし、その転移は、生産性の高いほうでは実現形をほぼ完全に決定する力を持つが、生産性の低いほうではややおちる。生産性の低い中間的・語彙的ヴォイスが中間言語としては形成されていないからである。この場合、中間言語としては、母語の転移に代わって、処理形式の生産性の判断が実現形の決定に関与する。

2. 5 語種の問題

2. 2項、および2. 3項での例文の検討で見たように、各誤用および正用には、和語と漢語という語種によるかたよが見られる。次の表5は、実現形ごとに、和語と漢語の分布を示したものである。表現意図は、この問題に直接かかわらないので、表を作る要素としては取り上げない。

和語動詞は中間的・語彙的ヴォイスの対立を持つものが多い。一方、漢語動詞は中間的ヴォイス対立を持たず、自他両用のものも多い。このため、自動詞使役を実現形とする誤用は和語動詞に多くなる。優先すべき中間的・語彙的ヴォイスがあるので、文法的ヴォイスによる処理を行った場合、誤用となる可能性が高いからである。表でも和語が6であるのに対し漢語は1である。一方、自動詞使役を実現形とする正用は漢語動詞に多くなる。優先すべき中間的・語彙的ヴォイスがないので、文法的ヴォイスによる処理を行っても、正しくなる可能性が高いからである。表では和語4に対し漢語8となっている。和語と漢語という語種の差が、誤用と正用の別にかかわることになる。

表5 語種別の実現形

	自動詞使役		他動詞		その他	
	和語	漢語	和語	漢語	和語	漢語
誤用	6	1	1	5	0	0
正用	4	8	10	9	1	0

これに対して、他動詞を実現形とする場合はやや異なる。他動詞を実現形とする誤用に和語が1例と少ないのは、中間言語としては、中間的・語彙的ヴォイスが形成されていないからである。中間的ヴォイスの他動詞形または語彙的ヴォイスの他動詞が知識として形成されていなければ、中間的・語彙的ヴォイスを持つ和語動詞の選択自体が少なくなる。よって他動詞を実現形とする誤用に、たまたま漢語動詞が多くなるのである。正用について見れば、正用は高度な知識が中間言語として完成していることを意味するので、和語漢語による差が大きい。

3. 結 論

以上の議論から、自動詞使役と他動詞に関する中間言語は、仮説1と仮説2の両方を折衷した形で、以下のように構成される。

中間的・語彙的ヴォイスは生産性の低い個別の情報であるが、文法的ヴォイスの使役は生産性の高い形式である。使役は中国語でも生産性の高い文型的な処理で作られ、それに比べて動詞の自他は生産性をほぼ持たない。母語が生産性の高い形式であり、それに対応すると学習者が考える目標言語も生産性の高い形式であるとき、母語は転移する。しかし、母語が生産性の低い形式であり、それに対応すると学習者が考える目標言語の形式がやはり生産性の低い形式であるときには、転移は弱まり、目標言語でより生産性の高い形式が現れる可能性を持つ。

注

- 1) 日本語学習者の中間言語については、渋谷(1988)長友(1993)などを参照。
- 2) 以下の記述は、野田(1991) pp. 211-212, pp. 219-223による。
- 3) 野田(1991) p. 223の引く例。
- 4) 詳しくは楊(1989) pp. 28-33, pp. 120-131, pp. 157-178, 劉ほか(1983) pp. 94-95, pp. 448-449, 李(1993) pp. 8-9, pp. 416-425などを参照。
- 5) この中国語での意味は、完成した日本語作文について調査したもので、母語転移ではなく、日本語から中国語への逆転移である可能性もある。
- 6) 以下に挙げた例文(8)で、「讓人有感覺」は、不定の名詞「人」を主格として、所有の動詞「有」を使ったものである。

- 7) 以下に挙げた例文の(6)と(9)である。たとえば(6)の「運送費を省かせる」という誤用例では、日本語の「省く」は他動詞であるが、表現意図に「使運費省」とあるので、「省く」を自動詞扱いしているとする。
- 8) 以下の例文(11)から(16)である。たとえば、(15)の「友好関係を発展する」の「発展する」は、正しい日本語としては自動詞であるが、格助詞「ヲ」が使われているので、他動詞扱いしているとする。
- 9) 「使自己的生活變得豐富多彩」を表現意図とする「自分の生活が豊かになる」という文である。
- 10) その他の誤用に関しては、浅山(1993)を参照。なお、本稿ではもともとなる資料を増やしたので、誤用の数はこの論文とは異なる。
- 11) 本稿での中国語の表記は、日本語との対比の便を考慮して、日本で用いられる漢字体による。
- 12) ここでは中国語話者が2～7年間前後の学習を終えた段階である。

参考文献

- 浅山佳郎(1993).「中国語話者の日本語作文に見られる「セル/サセル文」に関する誤用例分析」. 秋草学園短大紀要10号
- 長友和彦(1993).「日本語の中間言語研究—概観—」. 日本語教育81号
- 野田尚史(1991).「文法的なヴォイスと語意的なヴォイスの関係」仁田義雄編.『日本語のヴォイスと他動性』所収. くろしお出版
- 渋谷勝巳(1988).「中間言語研究の現況」. 日本語教育64号
- 李臨定(1993).『中国語文法総論』. 光生館
- 劉月華, 潘文娛, 故韓(1983)『实用現代漢語語法』. 外語教学与研究出版社. 北京
- 楊凱榮(1989).『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』. くろしお出版